

# 中新田地区商店街にぎわいビジョン 2026

～わたしたちの暮らしの真ん中にある商店街の挑戦～



中新田地区商店街にぎわいづくり委員会

## 1. はじめに

本ビジョンは、任意団体「中新田地区商店街にぎわいづくり委員会」が、自主事業として策定したものである。

中新田地区商店街にぎわいづくり委員会は2012年6月より活動を始め、委員一人ひとりの自発的な発案と参画によるボランティア活動を基本とし「にぎわいづくりは、まちづくり」を合言葉に、地域に根ざした取り組みを継続している。

2015年には、「中新田地区商店街にぎわいづくり委員会未来ストーリー計画」として、商店街の将来像についての提言書を加美町へ提出した。

活動開始から14年が経過し、社会情勢や商店街を取り巻く環境は大きく変化した。商店街だけでなく行政や関係機関と共通認識を持ち、計画的かつ継続的に取り組むため、改めて明確なビジョンを策定する必要があると考えた。

ビジョン策定にあたり、専門的な知見や多様な立場からの意見収集、先進事例の調査が必要であり自主財源も乏しいことから、令和7年度宮城県次世代型商店街形成支援事業を活用した。

委員会内部での議論や関係者との意見交換に加え、中新田地区の商工業者および商店街利用者へのアンケート調査を実施し、より多様な視点を踏まえたビジョンおよびアクションプラン（実行計画）の検討を行った。

本ビジョンは、町外からの移住や若い世代の集客だけでなく、商店街における地域住民の集いの場の創出や、中高生からアクティブシニアまで幅広い人々に支持される魅力的な商店街、魅力あるまちづくりを目指すものである。

その実現にあたっては、行政との協働や地元商店との連携が不可欠であり、今後は官民が一体となって取り組むことを目指す。

行政、商店街の担い手、関係機関、そして地域住民がそれぞれの立場から関わり、ともに中新田商店街の未来を思い描き、実行していくための共有の指針として本ビジョンが位置づけられることを願っている。

## 2. 加美町の概要

加美町は、宮城県の北西部に位置し、東西に約 32 キロメートル、南北に約 28 キロメートル、面積は約 461 平方キロメートルで、県内でも有数の面積を有している。

地形としては西部、北部、南部が山岳、丘陵地となっており、ブナなど豊かな森林を有する船形山や、町のシンボルとなる「薬菜山」がそびえている。丘陵地から鳴瀬川や田川などが町を貫流し、その流域は肥沃な田園地帯が広がりを見せ、まさに世界農業遺産「大崎耕土」の源であり、また近年はガン・ハクチョウ類の渡りルートとして確認された四季折々の自然の変化が満喫できる町でもある。

古代史では旧石器時代の遺物が発見されるとともに、縄文時代の遺跡が数多く存在しており、先史の時代から豊かな縄文文化が花開いていた。八世紀頃、この地域は、陸奥の国府多賀城より出羽国府（秋田城）に行く要衝の地にあつたため、兵士や人馬の往来が激しく大変な賑わいを呈していたものと思われる。中世を迎え、この地域は大崎氏の支配を受けることになったが、戦乱の時代を経て伊達家の藩政下に入った。伊達家は、領内の支配体制を確立するため田畑の総検地を行い、この検地によって 3 町の旧村の原型が確立した。

加美町の沿革としては、明治に入り、政府が中央集権国家の基礎を確立すると、明治 22 年には全国一律に行った「明治の大合併」により、27 村から 1 町 5 村（中新田町・鳴瀬村・広原村・小野田村・宮崎村・賀美石村）に統合された。昭和 29 年には、新制中学が合理的に運営できる人口規模という点を念頭にした「昭和の大合併」により、中新田町、広原村、鳴瀬村が中新田町に、宮崎村、賀美石村が宮崎町になり、昭和 18 年に町政を施行した小野田町を含め、3 町を構成してきた。2003 年（平成 15 年）4 月 1 日に、中新田町、小野田町、宮崎町が合併し『加美町』となった。

また、長い歴史の中で培われ、地域に根ざした生活文化や、県指定の無形文化財にも指定されている「中新田の虎舞」「小野田の田植踊」「切込の裸カセドリ」などが継承されている歴史豊かな町である。

加美町の人口は、1955 年（昭和 30 年）の 31,718 人をピークに減少を続け、2020 年国勢調査の総人口は 21,943 人だった。少子高齢化は国や県と比較しても進んでいる。国立社会保障・人口問題研究所が 2023 年（令和 5 年）に公表した推計人口によると、加美町の総人口は 2035 年で約 24%減（2020 年比）の 16,610 人、2050 年では約 46%減の 11,808 人になると推計されている。

加美町の商業は、小売店と郊外型大型店とに区分されるが、中新田商店街など中心部の商店街は、大型店や周辺自治体・仙台市等との競争を余儀なくされているほか、通信販売の需要拡大などの影響もあり、小売店の購買力の低下が大きな課題となっている。また、従事者の高齢化及び後継者不足、空き店舗の増加など、商店街は依然として厳しい状況が続いている。

（加美町 HP・第三次加美町総合計画より一部引用）

### 3. 加美町中新田地区の歴史と商店街

加美町中新田は、宮城県仙台市から約 36 キロメートルに位置し、北西に栗駒山、南西を船形連峰と奥羽山脈に囲まれ、その源から清流鳴瀬川と田川の合流点に開けた豊穡の地である。

中新田の地名は、1296 年(永仁 4 年)足利尊氏の父定氏が倉持家行に宛てた下し文「加美郡内穀積郷、沼袋郷半分、中新田郷内屋敷田畑」に記載があり、中新田が歴史の舞台に登場する始まりである。

その後時代を経て、寛永元年頃に、まちの区割りを南町・西町・岡町とする現在の町場の整備が始まり 1640 年(寛永 17 年)に完成している。

まちは、商業の町として作られ発展したが、商店主は船をしたて、関西から日本海を回漕し、酒田港に着き、軽井沢峠越えと田代西峠越え二つの最上海道を通して、物品を運んだ。

「大阪古手(関西から仕入れた古着) 上物は中新田の古着商人の土蔵に在り」と称せられるほどまちは栄え、染物屋も興り、紙幣の一種である「私札」を発行している店の名をかたった偽札の出現もあったほどである。

1830 年代(天保年間)頃の記録には朝市、芝居・相撲興行があり西町での花火大会の記録もあり、近郷近在の人々が集い楽しんだとある。また、農耕地帯を背景にした中新田の草刈ガマは、時代を経て北上川沿いを販路にして盛んに作られ、当時の南町あたりはリズムカルな槌音が流れていたと想像できる。

そして、まちは何度か町を焼き尽くす大火と水害に見舞われている。そのたびに、人々は助け合い困難を乗り越え復興してきた。

(中新田地区商店街にぎわいづくり委員会 12 周年記念誌より一部引用)

現在の加美町中新田地区には、花楽小路商店街を中心にいくつかの商店会が組織されており、地域と密接な関係を築きながら活動を続けている。

一方で、加美町は少子高齢化が進む地域であり、中新田地区商店街においても後継者不足や担い手の減少が大きな課題となっている。さらにコロナ禍による影響や物価高騰などにより、商店街の経営環境は依然として厳しい状況にある。

室町時代から今日に至るまで、中新田のまちづくりを支えてきたのは商人たちであった。明治以降、三度の大火から町を復興し、「火伏せの虎舞」を復活させ、8 月旧盆前夜の夏祭りを企画したのも商人たちの力である。

商店街は、地域の暮らしを支える場所であり、人と人がつながるコミュニティの拠点でもある。そして、地域の歴史や文化を受け継ぐ大切な場所でもある。

この町の歴史を未来へとつないでいくこと。それが、今を生きる私たちの責務であると考えている。

## 4. 中新田地区商店街にぎわいづくり委員会

### 活動理念「にぎわいづくりは、まちづくり」

中新田地区商店街にぎわいづくり委員会は、2012年6月に設置された。

宮城県加美町中新田地区の商店街を中心に、地域の魅力向上と持続的なにぎわい創出を目的として活動する任意団体である。

当委員会が考える「にぎわいづくり」とは、単にイベントを開催することにとどまらず、商店街の各店舗が365日の生業を継続し、地域全体の活性化につなげていくためのまちづくりと捉えている。

委員会は商店主や地域住民等の有志によって構成し、「にぎわいづくりは、まちづくり」を合言葉に、委員自らの発案と主体的な取り組みにより来町・来店のきっかけづくりを行ってきた。ボランティア組織として実践的な活動を展開する一方、行政や関係団体との連携・協働も重視し、官民一体となったまちづくりの推進をしている。

#### これまでの主な取り組み

- ・「にぎわい伝言板」設置（住民バス予約センター内に商店の案内を掲示）
- ・にぎわい通信発行（地域住民に委員会の活動報告を回覧）
- ・SNSによる情報発信
- ・商店街マップ「ちょっくら寄ってがいん」制作&配布
- ・「ぼのぼの庵」設置提案  
（住民バス予約センター内に加美町産木材を活用してテーブルと椅子の設置。  
中新田出身の漫画家いがらしみきお氏の作品「ぼのぼの」の看板がシンボル）
- ・中新田土産「お菓子のオーケストラ」企画&販売  
（加美郡内菓子店の菓子を集めたお菓子のセットをオリジナル包装にて販売）
- ・「にぎわいキッズ広場」開催（子どもたちの楽しめる企画）
- ・にぎわいオリジナルうちわ制作&配布（夏のイベントでの配布）
- ・おかみさんマップ「なじょなどこだかまがってみらいん」制作&配布
- ・ワークショップ「ウエルカムボード・プランターづくり」開催
- ・中新田高校M&A部（ミーティング&アクション）（地域連携）
- ・卒業・入学おめでとうメッセージ（商店街に掲示し地域の学生を応援）
- ・にぎわいグッズ企画&販売（委員会オリジナル商品）
- ・「着物 de 花楽まちあるき」開催（着物を楽しみながらスタンプラリー）
- ・「未来へのプロムナード～魂の記憶～」染型紙灯籠  
（老舗呉服店に保管されている染型紙を活用し、中新田の慣習である旧盆前夜のお墓参りを伝承）  
など

## 5. ビジョン策定事業の経緯と経過

本事業は、「令和7年度宮城県次世代型商店街形成支援事業」の採択を受けて実施した。

町外からの移住や若い世代の集客を目指しながら、商店街に地域住民の集いの場の創出や、若者からアクティブシニアまで幅広い人々に支持される魅力的な商店街、魅力あるまちづくりを目指すものである。

様々な組織と連携しながら、加美町中新田地区商店街の将来を見据えたビジョン形成を行いたいと考え、そのための専門家を招いた検討や、加美町・加美商工会・商店会と協力して課題解決のための調査を実施した。

また、モデル事業として成功している長井市の取り組みから、広域的な視点で商店街活性化策や具体的な課題解決策を学び、本商店街ビジョン形成および事業計画策定に活かした。

### 2025年

- 7月15日 どこでも町長室実施(寅や) 町の方向性
- 7月23日 「令和7年度宮城県次世代型商店街形成支援事業」採択
- 8月25日 アドバイザー（宮城大学平岡教授）依頼および打ち合わせ
- 9月12日 ミーティング（アドバイザー出席）
- 10月 ニーズ調査開始（商店街利用者アンケート）2026年2月まで実施
- 10月11日 イベント「着物 de 花楽まちあるき」アンケート実施 ニーズ調査
- 11月13日 山形県長井市視察研修（アドバイザー出席）
- 11月 課題調査開始（商工業者アンケート）
- 12月15日 ミーティング（アドバイザー出席）

### 2026年

- 1月30日 町長面談（中間報告） 町の方向性
- 2月10日 宮城県「商店街×まちづくりネットワーク」にて活動報告
- 2月17日 中新田地区商店街活性化委員会にて説明およびヒアリング
- 2月 ミーティング（幹事会）
- 3月18日 ミーティング（アドバイザー出席）
- 4月 加美町へ提出および要望

## 6. ビジョン策定事業の調査結果

私たちは、第三次加美町総合計画や町長との懇談を通じて、町の方向性であるコンセプト「和と美」および中新田商店街の観光地化という方針を確認・尊重しながら、中新田地区商工業者に対する課題調査、商店街利用者に対するニーズ調査、さらに山形県長井市の視察研修を行った。これらを通じて委員が得た気づきや考察をもとに、いくつかのキーワードを抽出し中新田地区商店街の未来像を検討した。

まず、課題調査では、商工業者の後継者不足や高齢化が課題であることを経営者自身も感じており、行政との連携が不可欠だという声が多く、次世代へつなぐ仕組みづくりや新たな担い手の参画が求められていることが浮き彫りとなった。これは、ビジョンに掲げる「歴史と文化が生き、挑戦できる商店街」や若者や新規出店者が挑戦しやすい環境づくりへとつながった。

また、ニーズ調査においては、来街者から休憩スペースや子どもと楽しめる場、店舗情報の発信を求める声が多く寄せられ、商店街が日常の中で立ち寄り、過ごし、語らう場であることへの期待が示された。これは、「商店街は、暮らしが息づくあなたの居場所」というビジョンに反映した。

さらに視察においては、まちづくりには官民連携が欠かせないこと、そして活動を続けていく力や人の想いが地域の魅力になることを改めて実感した。また中新田の持つ価値や良さを客観的に見つめ直す貴重な機会ともなった。ビジョンでは「誰かではない。みんなで未来を紡ぐ商店街」における官民協働と持続的な取り組みの方向性を示した。

本ビジョンは、調査結果や現場での気づきを丁寧を受けとめながら、中新田商店街が暮らしのなかで大切な場所となり、新たな挑戦ができる場となるよう、その未来像を表現したものである。今後、本ビジョンをもとに、地域に希望を感じられる商店街の実現に向けて、関係機関と連携しながら継続的に取り組んでいきたい。

- |                 |   |     |
|-----------------|---|-----|
| ・ <u>町の方向性</u>  | どこでも町長室（2025.7.15）<br>町長面談（中間報告）（2026.1.30） | 資料1 |
| ・ <u>視察研修</u>   | 山形県長井市（2025.11.13）                          | 資料2 |
| ・ <u>課題調査</u>   | 商工業者アンケート（2025.11）                          | 資料3 |
| ・ <u>ニーズ調査</u>  | 商店街利用者アンケート（2025.10～2026.1）                 | 資料4 |
| ・ <u>ミーティング</u> | にぎわいづくり委員会での検討                              | 資料5 |

## 7. 中新田地区商店街にぎわいビジョン 2026 ～わたしたちの暮らしの真ん中にある商店街の挑戦～

### 【歴史と文化が生き、挑戦できる商店街】

歴史・文化・人の営みを次世代につなぎ、選ばれる商店街へ

中新田らしい歴史と文化を礎に、商店ならではの魅力を活かした商店街を目指す。移住者や若者、アクティブシニアが主体的に参画できるまちづくりを進め、世代を越えた力が地域の活力となる循環を生み出す。さらに、若者や新規出店者が挑戦しやすい環境を整え、商店街を未来へ挑み続けるフィールドとする。

### 【商店街は、暮らしが息づくあなたの居場所】

「ただいま、おかえり」が聞こえる街へ

商店街は、単に「買う場所」ではない。立ち寄り、過ごし、語らう、日常の居場所である。子どもから高齢者まで、町内外の来訪者が、明確な目的がなくとも、ふと足を運びたくなる日常性を備えた空間。大型店やインターネット通販にはない顔の見える関係性と、人に寄り添うきめ細やかな対応がある。商いを通して、人と人、暮らしと地域をつなぐ。

### 【誰かではない。みんなで未来を紡ぐ商店街】

官民が一体となって取り組み、挑戦をやめない中新田へ

官民の協働と協創によるまちづくりを推進し、店主だけでなく、行政や関係団体、地域住民、利用者がともに関わる商店街を目指す。それぞれの立場や役割を越えて力を持ち寄り、対話を重ねながら地域の価値を共につくり上げていく。一過性の取り組みに終わらせるのではなく、活動を継続していく覚悟を持ち、持続可能な商店街づくりに取り組む。

わたしたちの暮らしの真ん中にある中新田商店街は、先人によって積み重ねられた歴史と文化を礎に、現在の地域コミュニティを支えながら、未来の新たな商いの創出と挑戦を生み出すステージになる。

**Where the past meets the present — and the future begins**

(過去と現在が出会う場所、そして未来が始まる)

## 8. アクションプラン

### ★アクション1

【歴史と文化が生き、挑戦できる商店街】

歴史・文化・人の営みを次世代につなぎ、選ばれる商店街へ

- ・「中新田」を地域ブランディング
- ・情報発信強化（IT活用支援）
- ・各店の商品・店主の人柄を可視化（マップ・SNS・店頭表示）
- ・空き店舗を活用したチャレンジ出店・業態転換支援
- ・商店主・行政・住民が参加できる「にぎわいミーティング」の開催
- ・商店街を舞台にした住民参加型イベント

### ★アクション2

【商店街は、暮らしが息づくあなたの居場所】

「ただいま、おかえり」が聞こえる街へ

- ・誰でも立ち寄れる場所（どこでもカフェ・休憩スペース）の整備  
ぼのぼの庵（住民バス予約センター内）の活用
- ・環境整備（ベンチ、トイレ、駐車場、看板など）
- ・歩いて楽しい商店街
- ・空き店舗や既存施設を活用した誰でも使える場所づくり  
（休憩・飲食・交流）
- ・子どもから高齢者まで日常的に利用できる滞在空間の創出
- ・駐車場・導線の分かりやすい案内看板整備

### ★アクション3

【誰かではない。みんなで未来を紡ぐ商店街】

官民が一体となって取り組み、挑戦をやめない中新田へ

- ・中新田地域全体の将来像を示す「ランドデザインの策定」
- ・年5回の関係機関による連携会議（課題・情報共有実行のための公式会議）  
（加美町・観光まちづくり協会・加美商工会・商店街組織など）
- ・商店街単独ではなく町全体・周辺地域と連携した集客・観光施策
- ・空き店舗対策、事業承継、創業支援を一体で進める仕組みづくり

## 9. ビジョン実現にむけて（協力関係団体）

加美町

加美商工会

加美商工会青年部中新田支部

加美商工会女性部中新田支部

（協）中新田花楽小路商店街振興会

中新田地区各商店会

西町商和会

新丁商店会

南町まちづくり協議会

並柳南光商店会

岡町商振会

中央通り商店会

加美町観光まちづくり協会

中新田地区商店街にぎわいづくり委員会

## 10. おわりに

にぎわいづくりは、まちづくり。

変化の中にこそある永遠、その彼方を見据え描く。

持続可能な価値を宿し、暮らしと記憶が残る私たちの商店街未来ビジョン  
—中新田地区商店街にぎわいづくり委員会 令和版方法序説—

先日、祖父の三十三回忌法要を営んだ際、住職の法話の中で「人は亡くなって三十三回忌を迎えると、高い山の頂で神になる」という一節があり、深く心に残った。

これまで数多の神々（祖先）たちが、時に器用に、時に不格好に、時に人知の及ばぬ何者かに翻弄されながらも、この街の未来予想図を思い描き、時代を生きてきた。いま、私たちもまた、子や孫のために、決してバラ色とは言わないまでも、この街の未来の景色を必死に描こうとしている。

そのすべてを自らの目で見ることにはできないかもしれない。しかし、決して無為ではないと信じている。今、私たちに必要なのは、官民が一体となり、何者にも揺るがされず、この街を遺跡にしないという強固な覚悟であろう。

昭和・平成・令和と長きにわたり、商店街活性化や再整備などの施策を含め、商店街の未来ビジョンについては、その時代の商店主たちが行政とともに幾度となく議論を重ね、そのたびに決して少なくない時間と費用を費やしてきた。

当委員会においても、今から十年前に「商店街未来ストーリー」として町へ提言書を提出した。その結果、「中新田地区商店街活性化基本計画及び基本設計」など多くの報告書・資料が蓄積されたものの、さまざまな理由により計画を実現に至らせることはできなかった。

現在、商店街では商店主の高齢化が進み、空き店舗や空き地が増加している。懸命に取り組む私たちにも、残された時間は決して多くない。

そのような現実の中、かつては「従来型モデルは終焉を迎え、一定の役割を終えた場所」と評された中新田商店街であるが、現町長は就任当初より、同商店街をこの町の「中心・へそ」と位置づけ、方法論次第で再編の自由度は高いとし、商店街および現西田庁舎を含めた周辺整備・活性化について、新庁舎建設と同様に、観光地化も含め最大限対応し注力すると公言してくださっている。

「へそ」とは、物事や場所の中央にあたり、重要な部分、肝心要を意味する言葉である。本来、人間の身体の一部である「へそ」は、母と子をつなぎ、新たな生命の誕生に際して極めて重要な役割を果たす。

そうであるならば、「中新田地区商店街」は、加美町の「現在」と「未来」をつなぐ大切な場所にほかならない。

今回、令和七年宮城県次世代型商店街支援事業の採択を受け、新たな中新田地区商

店街のビジョンを策定するにあたり、互いの思いを尊重しながら連携する官民一体の「協創・協働」なくして、町の未来はないと改めて強く感じている。

同じ通りに軒を連ねているだけでは、もはや組織として成り立たない時代である。業種や立場、年齢や性別といった従来の枠組みを超えた新たな組織によって、「まちづくり・にぎわいづくり」を検討し、実践していくことが不可欠である。以下、上記を踏まえた商店街の未来ビジョン策定に向けた方法論を私なりに整理してみた。

## 変化の中に永続性を見出すために

### ① 哲学的基盤の設定

#### 「存在意義（パーパス）」を言語化する

この商店街は、なぜ存在するのか。デジタル時代において、物理空間としての商店街の価値とは何か。そこに「信頼」は宿るのか。

いまこそ「残したい価値」を定義し、「永遠に残したいもの」を定める必要がある。商店街の未来ビジョンとは、変化の中で何を守り、何を手放すかを定める行為である。永遠とは固定ではない。「更新し続けること」そのものにある。

### ② 共同幻想の可視化と再設計

商店街は「買い物場」なのか。「祭りの場」なのか。「生活インフラ」なのか。「心の避難所」なのか。「商店街とは何か」という無意識の前提を洗い出し、再設計する。

### ③ 災害やパンデミックの記憶を未来設計に組み込む

東日本大震災やコロナ禍は、「想定外は必ず起こる」という現実を我々に突きつけた。今後ますます災害やパンデミックを前提としたビジョンづくりが求められる。

### ④ アナログと生成 AI の融合 — 技術と人間の役割分担

生成 AI が映し出す「美しい世界」は活用する。しかし、依存しない。

需要予測、デザイン、広報、仮想商店街の構築などに生成 AI は有効である。

しかし、そこに「信頼」や「想い」は宿るのか。

顔の見える商売を軸に据えること。技術は道具であり、信頼は人が担う。

店主の高齢化を弱点と捉えるのではなく、「信頼資本」として位置づける。

### ⑤ 商店街の再定義

商店街は単なる商業集積ではない。経済圏、文化圏、防災拠点、高齢者の見守りネットワーク、アクティブシニアや若者の挑戦の場など、生活インフラを担う複合拠点として再定義する。買い物機能だけでなく、人々にとっての「必要な場所」となること。すなわち、「歴史と暮らしの核」としての最後の生活拠点・よりどころとなることを目指すことが重要ではないだろうか。

冒頭の神々の話から、村上春樹の短編集『神の子どもたちはみな踊る』を思い出した。震災にまつわる作品群である。その最終章に収められた「蜂蜜パイ」という私の

好きな作品の一節を引用し、本稿の結びとしたい。

文中の「小説」という言葉を「街（まち）」や「ビジョン」を描くという文言に置き換えてお読みいただければ幸いである。

夜が明けて小夜子が目を覚ましたら、すぐに結婚を申し込もう。淳平はそう心を決めた。もう迷いはない。これ以上一刻も無駄にできない。淳平は音を立てないように寝室のドアを開け、布団にくるまって眠っている小夜子と沙羅の姿を眺めた。沙羅は小夜子に背中を向けて眠り、小夜子はその肩に軽く手をかけていた。淳平は枕の上に落ちた小夜子の髪に手を触れ、それから沙羅の小さなピンク色の頬に指先を触れた。2人とも身動きひとつしなかった。彼はベッドの脇のカーペット敷の床に腰を下ろし壁にもたれ寝ずの番についた。淳平は壁にかかった時計の針を眺めながら、沙羅に聞かせるお話の続きを考えた。熊のマサキチとトンキチの話だ。まずはこの話に出口を見つけなくてはならない。トンキチは無為に動物園に送られたりするべきではない。そこには救いがなくてはならない。淳平は物語の流れをもう一度最初から辿ってみた。そのうちに漠然としたアイデアが彼の頭の中に芽を出し少しずつ具体的な形を取っていった。トンキチはマサキチの集めた蜂蜜を使って蜂蜜パイを焼くことを思いついた。少し練習してみた後で、トンキチにはカリッとした美味しい蜂蜜パイを作る才能があることがわかった。マサキチはその蜂蜜パイを町に持って行って人々に売った。人々は蜂蜜パイを気に入りそれは飛ぶように売れた。そしてトンキチとマサキチは離れ離れになることなく、山の中で幸福に親友として暮らすことができた。沙羅はきっとその新しい結末を喜ぶだろう。おそらく小夜子も。これまでとは違う小説を書こう、と淳平は思う。夜が明けて辺りが明るくなり、その光の中で愛する人々をしっかりと抱き締める事を、誰かが夢見て待ちわびているような、そんな小説を。でも今はとりあえずここにいて、2人の女を守らなくてはならない。相手が誰であろうと、わけのわからない箱に入れさせたりはしない。たとえ空が落ちてきても、大地が音を立てて裂けても。

本事業の実施にあたり、宮城県ご担当者様をはじめ、ご尽力いただいたすべての皆様に、改めて心より感謝と御礼を申し上げます。

中新田地区商店街にぎわいづくり委員会 委員長 高橋庸介